

はくさん



第2巻 第2号

石川県白山自然保護センター

も く じ

蛇谷の高茎草原—白山の植生 5	菅沼 孝之	1
白山の声のブッポウソウ	松尾 秀邦	3
旅の途中で	熊谷 勝郎	4
白山ザル生態—冬の生活(一)	糸田 敬仁	6
落書帳より		7
山 日 記		8
石川県の自然公園 4		
山中・大日山県立自然公園	樫田 専治	9
た よ り		10

表紙解説

岩間ヒュッテ

室堂から約7時間、大汝峰、御手洗鉢を経て岩間道を下ると岩間ヒュッテにたどりつく。
この付近には、特別天然記念物岩間の噴泉塔群で代表されるように、温泉源が多数存在する。
ヒュッテ前を流れる湯谷川にも新岩間へと続く引湯施設や露天風呂があり、登山者の疲れを癒してくれる。

このヒュッテは、数あるヒュッテの中で最も古く、昭和33年、当時の金額で95万円が投じられ、その後昭和45年に一部改修が加えられて現在に至っている。

〈自然保護課〉

蛇谷の高茎草原—サルの餌場として

—白山の植生 5—

菅 沼 孝 之

前報(第1巻第4号4—5ページ)で、蛇谷一帯に発達する高茎草原の種類組成を調べた結果、「ヤマヨモギ—クロバナヒキオコソ群集」という多雪地帯にみられる特徴をもった群落であることにふれた。この群落は標高差約1,000 mにわたって、谷筋など蛇谷一帯の各所に分布していることがわかった。さらに、この群落が、多雪地にもかかわらず生息する7群にもおよぶニホンザルの良い餌場になっていることについてもふれた。

そこで、われわれの研究室では1/25,000地形図の上に、航空写真を使って判読した高茎草原をていねいに書き込んだ。実地に調査のできる場所は歩いて検討し、行くことができないようなところでは、歩いて調査したことがらを基礎にして航空写真のみにたよって、草原の投影分布図を作成した。この図や、前報、本報でふれたことで、専門的なことがらについては、「石川県白山自然保護センター研究報告第1集、65—70ページ(1974)」をごらんいただきたい。

とにかく、この分布図に、河合らが1970年に「白山の自然」に発表した蛇谷のニホンザルの各群れのテリトリーを書き入れた。そうすると、テリトリーごとに、餌場としての高茎草原の投影面積をつかむことができるわけである。面積は1mmの方眼紙を使ってたんねんに測定した。

さらに、垂直高度で100 m昇るごとに、一般

的に0.6℃気温が下っていく。蛇谷の高茎草原の分布域での標高差約1000 mは、上部と下部での温度差が6℃もあるということになるので、植物が芽生えはじめる時期も当然違ってよいであろうと考え、高度別——ここでは100mごと——に区切って測定した。雪というのは、地形と対応して、どのような深さで積るのか、また、雪崩によって、どのような状態に積もるのか、それぞれの場所によって違うので、この100 mごとに区切った意味は、われわれが考えているほどニホンザルの餌を提供する場所としての重要性はないのかも知れない。しかし、季節を追って、群れの移動が見られるということであるので、一つの目安としてごらんいただきたい。

こうして、できたのが、つぎに示す表である。

このようにして得られた数値を低いところから高いところまで、たてに合計し、それを各群れの頭数(1970年頃)で割って、一頭あたりの餌場の面積を出した。すると、冬瓜A群と丸石谷群の2群を除くと、非常によく似た数字になった。

冬瓜A群とは、蛇谷の餌づけ場に出現するグループで、餌づけにたよっているのだから、自然の餌を供給される場所は狭くてもよいのであろう。丸石谷群の場合は、群れのテリトリーがはっきりしていないということも、このニホンザルを調べておられる河合雅雄先生か

蛇谷のニホンザルの群れに対する高茎草原の投影面積
(単位は1,000m²)の垂直分布 (菅沼・芳賀, 1974)

グループ名 頭数	冬瓜A	途中谷	湯谷	丸石谷	タイコ	国見	冬瓜B
600	109.4	83.1	4.4	13.9	15.6		
700	83.8	101.3	55.0	60.9	103.1	3.1	
800	46.3	75.0	85.6	82.2	163.8	15.6	
900	28.8	49.3	88.1	58.1	156.3	14.4	23.8
1000	28.8	33.8	58.8	54.4	128.1	26.3	38.1
1100	65.6	0.6	25.6	41.3	121.9	25.0	97.5
1200	73.8		2.5	23.1	115.6	85.0	70.6
1300	141.3			24.4	60.0	50.0	44.4
1400	24.4			23.8	70.0	13.1	30.6
1500				10.0	15.0	0.6	4.4
1600					5.6		
1700							
総面積 一頭あたりの面積	602.2	343.1	320.0	392.1	955.0	233.1	309.4
	9.87	14.90	13.90	19.63	13.45	14.57	12.37

ら聞いた。この2群のとっぴな数字についてはこれで解釈できるわけである。

そうなると、最大面積の14,900m²と最小面積の12,370m²の間には数字の上では2,530m²の差しかないことになる。もう少し大縮尺の地形図を使って、もっと精密に測定していけば、もっと差が縮まるのかも知れないし、また広がるものかも知れない。現状で判断したら、誤差にも等しいこの数値は、自然の摂理をあまりにもはっきり示しているようで、そらおそろしい感じがしないでもない。

おそらく、多雪と、寒さとにうちかち、生活できるための最小の資源を確保すればよいのだと、ニホンザルが考えているのかどうかはわからないが、それは永年の間に身につけた「サルヂエ」かも知れない。

人類が、要、不要に抱らず、むちゃくちゃにとりまくったり、生産したりして、そのむくいをこうむっているのに比較すると、「ヒトヂエ」のおろかさが、こっけいでさえある。

さて、わたしがいいたいのは、蛇谷とは、そんなところであるから、スーパー林道の工事によって、直接的にも、間接的にも、ニホンザルの群れのテリトリーを荒すことのないように、くれぐれも注意してほしいということである。多雪地で、これほど多くの群れがよりそって集まっているところは、他にはどこにも見られないのだということであるからなおさらのことである

〈奈良女子大学理学部〉

白山の声のブッポウソウ

松尾秀邦

昭和10年に録音した鳳来寺山の声のブッポウソウを先日再び聞いた。この録音を聞いた当時は台北市立旭尋常小学校の六年の夏であって、当時解説したアナウンサー以上に興奮したものである。葉鳴りを起している山風におびき出された様に遠く近く鳴き渡る声に感無量という次第であった。

少年時の感激が16年経って、白山の中宮道の中途にあるシナノキ小屋で聞いた時の新たな感激を思い起させてくれた事を思い出した。

当時、感激の余り、北国新聞に投稿した。これを御読みにになった長柄多喜男先生から私信を頂戴し、石川県白山筋での声には未だ接して居らぬが、コノハヅクの羽を能登路で拾われているとの内容であった。それから幾年か経って、日本野鳥の会が、中西悟堂会長御自ら「白山探鳥の会」を催されたことがあったが、その時は天候に恵まれず、声のブッポウソウに接することなく会を終ったと伺っている。

シナノキ小屋の感激から14年経って、メッコ谷の調査でナル谷の手前のヤッチャ谷の合流点でキャンプを行なった時に、谷筋一杯に響き渡る声を聞いた。テント内の学生を「おい、声のブッポウソウだ」と起したが、昼間の疲れで誰れも起きて呉れなかった。先述のシナノキ小屋の時は同行していた加藤誠君（現在は北大・理・地質学教室の助教授）を起して聞いて貰ったし、人夫をしてもらっていた尾添部落の方々にも確認して頂いて、「アレ

が長鳴きの時は翌日から晴れる」と、当時長雨でまいていた調査行程の中で、良く晴れた数日の前の晩のことであった。興奮して眠れず、夜半から朝方まで、とにかく一羽が、数時間も間断なく良く鳴き続けられるものだと感心した次第であった。

処が、シナノキ小屋の中宮道でもそうであったが、谷筋一つ越えた翌日の夜は聞かれなかった。谷一筋が彼の縄張りなのであろうか。メッコ谷でも翌日ナル谷合流点でテントを張った時は、昨夜の声は一声も聞えず、翌日も、翌々日も、遂にキャンプを行っていた五晩何れも駄目であったので、同行の学生達に疑われて弱った。

NHK、ラジオでの鳳来寺山からの中継を聞いていると、永六輔の粘っこい舌足らずの雑音で興をそがれたが、鳴いているのは一羽だけであった。集音マイクの技術の発達から考えると、一羽だけ正確にキャッチしてくれているのかとも思ったが、恐らく各谷筋に備えたマイクに一羽だけしか集音出来なかったのであろう。それ程鳳来寺山でも数少なくなつたのか。昭和10年の録音の様に遠く、近く、少くとも二羽以上が入っていないのである。

それにしても中継放送の時の一羽は良く鳴いて呉れた。少年、青年、壮年時代の楽しい思い出を引き出して呉れた事に感謝したい気持であった。残った老年期に白山での声のブッポウソウにもう一度接する機会に恵まれないものである。　　<金沢大学教養部>

旅の途中で



熊谷勝郎

6月3日の朝早く金大の北溟寮を出発した私は、国道157号線に2台の車を乗りついで古野谷村へは行った。何日か天候も良く、その日もまだ暑くならないうちの快い陽光を身体全体で受けながら、背中のリュックのいくらかの重さも快適に車通りの少ない道を例によってブラブラ歩いていた。その日は福井県の勝山、大野を通過して岐阜県の白鳥へ出、そこから156号線で荘川へ向かい、更に158号線で高山まで行くのが一応の予定だった。しかし明瞭な予定のない勝手気儘な旅。どこでどう変わるか予測が立たない。

私の故郷は岩手県の沿岸南部。三陸海岸の地である。ここはリアス式海岸であり、陸中海岸国立公園南部の景勝地でもある。前は海、後ろは山。まさしく自然に恵まれた環境で生まれ育った私は、東京で日々暮していると時折苦しくなることがある。それでも私の下宿は山の手にあるので庭のある家も多く数えられ、そこには幾らかの木や花などもあるのだが、それはまさしく幾らかのであり、限られた空間でもある。

5月下旬のある日、私はふと上高地に行きたくなった。3年前、生まれて初めてそこへ行った際の印象は忘れられず、今でも和らかに包容してくれるものがある。その印象を反芻しながら、学校は当分自主休講して旅立つことにする。

5月30日の朝、東京を出発。その日のうちに松本へ着く。2日目は上高地の予定であっ

たが天候不順により諦め、金沢へ向かうことにする。昼頃は大町の山岳博物館で過ごし、午後は糸魚川へ抜け、富山を通過して高岡へ着き、そこで一泊。翌日と翌々日は金沢で泊り、2日間金沢の街を歩き回る。

追い越しをかけていた乗用車が私の合図を認めて停車し、私を拾ってくれた。運転していたのは白山自然保護センターの職員の方であった。私はそれまで白山とは何の関わりも持っておらず、その知識は単にその名を知っているということだけにしか過ぎなかった。しかし、その職員の方から白山に関するさまざまな話、そして自然保護の話聴いているうちに興味が湧いてきた。自然という問題について私はそれまで往々にして視覚的に受け取りがちであって、そこに生きる生物の問題、しいてはそれが人間の存在に大きな関わりを持つという深い意味合いを見逃しがちであったと反省する。

気儘な旅なので、早速白山自然保護センターへと予定を変更する。昨年完成したばかりとあってセンターはまだ新しく立派な建物であった。展示物を興味深く見学する。仲々工夫された理解しやすい展示の仕方であるが、建物の割には展示室のスペースの狭さや、展示物や公開資料の少なさにささやかな不満を覚える。まだ開館して日が浅いのだから当然ではあるが、大町山岳博物館の古い木造の建物でありながらその意欲的な展示が印象的であっただけに。

蛇谷の野猿広場には浴衣姿の温泉客が何人かいたが、しかし肝心の猿の姿は一匹も見当らない。管理人の方が先程猿を呼びに山へ行った由だが、しばらく待っても猿は現われてくれない。さすが野生動物。人間のやるエサなどあまりあてにしないようだ。そのうち昼近くなり、ついに痺れを切らした浴衣姿の客の1人は「猿に振られて帰るか!」と言い残して下って行った。他の人も私も後に続く。午後はまた野猿広場へ戻ったり、川原へ下ってみたり、中宮温泉の湯にノンビリつかってみたりして時を過ごした私は、夕方になって「今宵石の上で猿と月を見るのは不可能だなァ」と独り言をつぶやきながら野猿広場のベンチの上に寝袋を広げた。耳に入ってくるのは溪流の音、風の樹木の葉を揺らす音

だけである。月が何とも言えぬような淡い光を蛇谷に投げかけている。私はウトウトしかけたその瞬間、昼読んだ「白山は全国でも有数の熊の棲息地である」という恐怖の説明文を思い出し、それまでのノンビリした気持がたちまち吹き飛んでしまった。その辺の木陰からノソノソと出て来るかも知れない。少しでも不可解なまたは激しい風の音などがするとウトウトしていてもすぐ目覚めて周囲を見回す。心臓の鼓動が高まっている。

ようやく夜が白々と明けてきた頃、私は疲れ果てていた。明るくなれば熊もこんな所までは出て来やしないだろう。"眠い"ということしか自覚出来なかった。そして安心のうちにまた寝てしまった。

〈明治大学学生〉

一匹は

穂草にひそみ

見張り猿

山本清嗣(金沢)

万緑や

大白山の谷深し

岩崎披炉子(輪島)

残雪の秘境のお湯をたづねきて

うつ世の汚れしばし忘れる

長瀬キヨ(大阪)



白山ザルの生態

—冬的生活(1)—



糸田 敬仁

自然が比較的に残されている国立公園白山の北西面に標高1,394 mの猿ヶ浄土山と言う岩山があるが、この周辺は山の名前が示す通り、餌づけされたカムリA群の根拠地である。

ここは四季の変化が激しく、今は目にしみるような新緑の季節であるが、秋にもなるると全山燃えるような紅葉に感嘆久しくするが、それもつかの間に白い雪に消され、白一色に塗りつぶされ交通もとだえ、全く無人地域となるのである。この様な気候的悪条件に加えて極寒期といえども、温泉帯の関係で頻りに雪崩が発生する地域に生息するサルの生態について簡単に述べてみたいと思う。

豪雪地域に生息する野生猿の越冬期に於ける生態の特徴として、秋の木の実や果実の実る頃は、餌づけされた猿といえども一向に餌場に姿を見せない。その間、谷周辺の山奥く深く入りこみ、豊富な自然食によって体調を整え、体重も増加してくる。また優秀なる皮下脂肪の備蓄によって、マイナス10度前後の寒期にもひるまず、激しく降り続く雪の中に岩棚や洞窟を利用せず風雪の反対方向の雪庇の下の樹に耐え忍んでいるのである。

また冬期の食性については、木の皮や冬芽が主食であり、雪崩後の地表の露出した後の高茎草原に、草の茎や根を掘り出して喰っているのである。然しながら、体力の消耗の激

しい極寒期にあっては、このような食物で生きのびることは到底不可能であると推察される。幸いにも先に備蓄した脂肪の消費によってまかなっているものと思われる。

数十万年以前の氷河期の進行に伴って、象やオオツノシカと共に東印度や東南アジアよりやって来たが、その中でも猿のみが生き抜いてきたことだけあって、立派だと思ふ。人間が思っているような、白山の猿は、寒かろう、ひもじかろうというような安易な同情や心配は不要なのである。

多数のサルが死亡した事故について

越冬上における生活の内容は先に述べた通りで、普通の年ならば特異な事態が発生しないのであるが、今年十年に一度の豪雪であり、且つ長い冬であった関係上、餌づけしたサルを問はず、野生のけもの達全般に影響を及ぼす、いわゆる自然淘汰で止む得ないことと推察しています。

サルの体重の記録

S 43.7~44.3

性別	区分	名	8月上旬	11月上旬	2月中旬	3月下旬
オス	若者	信助	kg 4.3	kg 5.7	kg 4.2	kg 4.4
オス	若者	清太郎	4.7	5.3	4.8	4.1
メス	成ジク	フジ	11.2	12.4	11.7	10.7

記録者 糸田・西村

<研究普及課>

落書帳より

センターのホールに「落書帳」と記された一冊の大学ノートが置いてあるのに気付かれた方もあるかと思います。

温泉客や遠路白山へ登りに来られた方、休日を利用して家族ドライブに来られた方、種々の人々がつれづれに書いて行かれます。

サルのこと、山のこと、花のことなど色々ありますが、その中の一つを原文のまま載せて見ました。書かれた方の氏名が解りません。御連絡下されば普及誌を送りたいと思います。

二度目の来訪です。

この山の中の中に、よくも温泉を見つけたりと
思う程。二年前に来た時、ほどよくおサルさん
たちに合いました。昔明月に載っていた雲太郎なる
ボスほどおかしな見物でしたが、こちらも「カネサル」
なので「イカい」を「おサルさん」で「出来たら勝手など」
したいと思う心を「神」に「おサルさん」に「腰」を
人間と動物の「接触」を「待つ」ための。

とかく「おサルさん」も「人間」で「おサルさん」
うまくいかないのだから。

幼い頃サルに「おサルさん」を「おサルさん」
おサルさんはおサルさんの中に入られていたのだから
おサルさんのおサルさん（おサルさんのおサルさん）
元々狭いおサルさんの中に入られたおサルさん
おサルさんのおサルさん。なんたって自然がいいのだ。
おサルさんのおサルさん、世に存在する動物全て。

二のおサルさんはおサルさん（おサルさん）だと思える。
おサルさんが「おサルさん」の「おサルさん」
おサルさん。

湯治に来るおサルさんとは自然の力に。

山日記

おっ！あったぞ。ミズバショウが50株ほど谷間が急に広がった砂地に生えている。それから一週間ほどして、話しを聞いて別のところへも出かけてみた。花期は過ぎていたが40株ほどあった。もっと早く来れば良かったなどといっているうちに、チドリを見つけた。殊才氏はテガタチドリじゃないかと言う。初めて耳にする名前で、「テガタ」とはなんの意味か合点がいかなかった。事務所に戻って調べると、根の形に由来した名であった。おまけに白山が西限であると記されているから、結構いい発見であったようだ。

6月15日また別のチドリを見つけた。こちらの方はノビネチドリらしい。これも根の形に由来した名と記されている。いずれも目には見えない土の中、しかも公園の中でもあるため掘り返して見る事はしなかった。いずれ植物の先生に聞いてみようと思っている。どちらも見ごたえのある花で思い出に残る。それぞれの場所の詳述は避けることにする。教えれば無くなってしまふ感じがするからだ。

白山は国立公園で、特に高山植物の豊富さには定評がある。公園の核心的な景観を万人の楽しめるようにするのは私たちの努めであるし、ミズバショウはここに、チドリはあそこにと親切に教えるべきかもしれない。でもうかつには教えられない気がする。去年中飯場、観光新道のハクサンチドリが盗まれた。山頂のハイマツの若木も、ほんの少ししか生えていないミヤマハイビャクシンも、アズマジャクナゲ、ハクサンジャクナゲも、大きなヒメコマツさえ持ち去る人がいる。

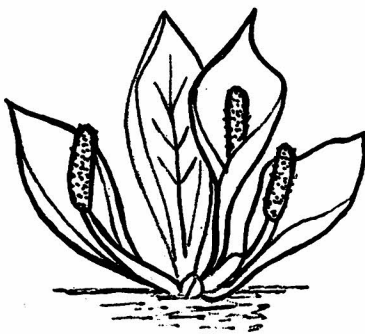
〇〇の会という自然愛好家のグループでさえ高山植物を取り、また完成まもないシナノキ小屋の支柱に落書きをしたりする。

そんな人達もいるなかで、お花畑を荒さないよう岩づたいに一足一足花に近寄り、写真を写している方もおられる。

花を見て堀り取ってしまう人、写真にとる人、自然を愛する気持ちにおいてはあまり差はないと思うが、公の園である事を理解しているかそうでないかの差が出てきているのだ。これから夏山に入る、花も沢山咲く。白山に登山する人の半数は石川県の人で、郷土の山を守るために、植物を取っている人を見かけたらここは公園ですよと声をかけていただきたい。木や草を一本取ったからと言って泥棒扱いする訳ではないが、登山者が好きだけ高山植物を持って帰れるほど豊かなお花畑はないのだから。

ミズバショウを見たい方は、来年の5月に当センター、あるいは市ノ瀬の公園管理事務所で開催して下さい。足に自信のない人でも見られます。

〈自然保護課〉



ミズバショウ

サトイモ科の植物で湿地に多く、岐阜県の蛭ヶ野ではピッシリとミズゴケのついた中に、同じ仲間のザゼンソウといっしょに咲いていた。

白い花に見えるのは、実は葉の変化したもので、花はその中の黄色の棒状のものである。

山中、大日山県立自然公園

石川県の代表的民謡、「山中節」で知られる加賀温泉郷の一つ山中温泉を既存の一大利用拠点とするこの自然公園は、将来近効レクリエーション利用の中心となる我谷ダム、富士写ヶ岳（943.4M）を含む地域（1.594ha）、大日山頂部一帯の最高1369Mを含む地域（766ha）、千束ヶ滝、女郎ヶ滝等の瀑布と溪谷を含む地域（192ha）、九谷焼の遺跡九谷集落等（24ha）の4団地からなり、総面積2,576haがその利用の増進と景観の保持のため、昭和42年10月1日、「山中・大日山県立自然公園」に指定されました。

この公園の特徴について簡単に説明してみましょう。

1. 現況と特性

イ 地形と地質

この公園区域は、大聖寺川中流及び上流域の山地と溪谷を包含する地域であり、山岳部の基盤は飛騨片麻岩類であって、その上に中世層があり、山岳火山である白山の熔岩流が一部を覆っていると云われる。この区域のうち、富士写ヶ岳及び周辺の山地一帯は、中新世の粒状安山岩類ですが、大日山とその山頂部周辺は更新世安山岩類であり、白山山頂部とほぼ同時代の火山であると考えられております。

ロ 地 被

大日山を最高峰とし、その植生は一般的にいきますと、落葉広葉樹林帯に属し中腹より上部にかけてはいわゆるブナ帯といわれます。しかし現在では標高800m附近まではすでにスギの造林地及び薪炭林用の雑木林となっており、さらに上部は伐採された地域が大部分を占めています。原始的景観を保っている地区はわずかで、富士写ヶ岳山頂部のシャクナゲ群落と、各所に残されたブナ林に過ぎません。

2. 保護について

景観保護の基本方針としては、特に利用の増加、利用者の集中が予想される山中温泉我ヶ谷ダムサイト周辺の風致景観維持に重点を置くほか、景観造成、修景、緑化の増進等今後の保護管理の徹底が望まれます。

3. 利用について

この県立自然公園には山中温泉に近接する鶴仙溪があり、温泉周辺の最大の興味対象として、「こおろぎ橋」を起点とする溪谷探勝遊歩道散策に四季を通じ多くの利用者を集めています。一方上流約10kmに九谷焼の発祥の地として知られ今もその窯跡が山中町文化財保護委員会で大切に保存されている九谷部落周辺、またその動線上にある杉水部落周辺の「県民の森」などの利用の増大が期待されます。

また整備については、峡谷の探勝施設、ダム周辺の探勝、行楽施設、山岳地帯における登山施設の整備を急ぎ、一層充実した自然公園をめざしたいものです。

〈樫田専治〉



たより

入梅というのに、毎日カラッとした天気が続いていたけど、きょうはひさしぶりに雨。センター前に植えたトチやケヤキもやっと活々してきた感じです。

開館してから約一年、仕事もふえてきてどこから手を付けて良いやら忙しい毎日です。その中で、センターの戸袋の上に巣をかけたキセキレイのヒナの成長が一つの楽しみだったのだけれど、いつのまにか姿が見えなくなってしまった。へびではないし、巣立ちにしては早いし、さては誰かが……と少々暗い気持ちにさせられてしまう。きょうも親鳥が一羽巣のそばで鳴いていた。

スーパー林道の開通も近く、白山少年自然の家もでき、自然に対する認識が深まりつつある中で、私たち職員も「自然保護とは何か」、「自然を保護するにはどうしたら良いのか」と毎日頭を悩ませています。そういった方程式を立てる前に少しでも多くの人たちに、本当の自然の姿、自然のしくみ、自然と人間との関係を理解していただくよう努力しています。毎日自然に接している私たちにとってさえ、刻々と変わる自然、場所によって異なる自然のしくみを知ることは大変なことですが、その中から得られたわずかな知識や資料をもとに、時には専門家をお願いして、この白山を教室にした楽しい行事を色々と計画しています。その内の主なものを次を書いておきますが、他に皆様方の方から、こういうことをして欲しいとか、こういうことを知りたいとか、映画の出張映写や、自然解説をしてくれといった御希望がありましたら係まで御連絡下さい。

○自然観察会、夏8月上旬、秋9月下旬

○特別展示「ニホンザルの生態」7月～8月

○その他講演会等の計画もあります。

○里の山菜、花の季節も終わりました。こんどは高山植物の季節です。7月～8月にかけて美しく咲きみだれる白山山頂の花の世界をそとのぞきに行ってみませんか？。



センターの軒下で生まれた、キセキレイのヒナ